

本部 閣報

○今の時、教化の重任に携はるものは、益々人々に正しい宗教の信念を興へ、そこに大志願力を以てお國の爲盡瘁せしむべく誘導せねばならぬ。本部に於ては毎週の日曜と月曜の例會の外、八日の大詔奉戴記念日等が、四月三十日の日曜日は日蓮聖人建長の時を偲んで、立教會を嚴修して後、井上男爵を圍んで立正安國の大義に就て歡談の時を過ぐるを忘れた。漸く日没に心付いて散會。

○先頃文相の「宗教に依る教化活動を強化促進する方策如何」の諮問案に對して、教界諸氏の意見を注意して居た處、ある宗教家の曰く「現在の宗教を理はすべし未來教であり、個人的であり、現世否定である。故にその本質が非國體的である」乃至「皇大神以外の本尊をたてて日本人の信仰を他國他土に連れて行くやうな宗教は、戦時下のみにあらず平時と雖も、日本國の邪教なりと云はざるを得ない。佛教の本質は決してかかるものではない。佛教は無我教であり、汎神教である。この教に本尊のあるべき筈がない」等。これは多分念佛門徒に對する痛棒とも思はれるが、佛教には無智、非常識、細子身中の蟲といふべき處論

統 一

昭和十九年十二月二十四日 第三種郵便物認可  
昭和十九年六月一日發行 毎月一日發行  
第五百九十一號

昭和三十年十二月二十四日 第三種郵便物認可  
昭和十九年七月一日發行 毎月一日發行  
第五百九十二號

# 統

第四十九年七月九日 號德累



である。けれ共多くの無宗教の人には何等かの示唆を促すものでないかと憂ふる。教家の身は其の一言一行に注意して聖典に基き正しい信仰、それは理智の上からも、道義の上からも、情操の高からも完備せる一乘の明教を知らしめて發心導得せしめることが極めて緊要事であると同時に、かかる教家の資格を制定さるべきであらう。實に「善知識は全梵行」の感を深くする。

○本團が清康謀白で終始一貫したことが、却て今日の外観貧弱の姿の統一誌となつたのは、世間でも道徳に生きる者が一時寂寥を覺ゆるやうなものであるまいかと思ふ。然るに宗教は量よりも質を尊重すべきであるから、たとへば數頁であつてもその内容が卓越して居れば教化の使命は果されつゝあるものではなからうか。尤大な雜誌であつてもそれが能く世を濟ひ人を利し導いて居るか否は相當に考へてせられる問題と思ふ。「日蓮は廣路を捨てて野要を好む」と思ふ。用紙の節約に伴つて今後は出来る限り返回布教といふことに就て地方の各位は須らく活用して戴きたいものである。勿論それは多數を集めることではなく、一家、一人であつても宜しい。眞に道を求めんとする召あらば早速御申込み下さい。但し時に就てのお約束は、交通の關係上出来まいから此點は豫めお承諾願つて置きます。而し

### 佛教六善事（那先經）

彌蘭王、沙門那先に問ふて言く、當に道は何等をか説くべきや。那先の言く、王要言を聽かんと欲すれば、當に要言を説くべし。王の言く、善言の道、何等をか最も善となすものぞ。那先の言く、誠信・孝順・精進・念善・一心・智慧是を善事と爲す。王の言く、何等をか誠信と爲すものぞ。

那先の言く、（至）誠（確）信とは人の疑を解き、佛有るを信じ、經法を信じ、比丘僧有るを信じ、羅漢道有るを信じ、今世有るを信じ、後世有るを信じ、父母に孝するを信じ、善を作さば善を得るを信じ、惡を作さば惡を得るを信じ、（虛無想否定）有るを信ず。是を以て後ら心便ち清淨にして五惡を去離す。何等の五ぞや。一には疑嫉、二には瞋怒、三には嗜臥、四には（放）恣（樂）、五には疑なり。人は是の五惡を去らざれば心意定まらず、是の五惡を去らば心便ち清淨なり。譬へば差遣越王の如し、車馬人從隨度して水をして渴惡ならしむ。過渡以去に王渴して水を得て飲まんと思ふ。王に清水珠あり、水中に置くに水即ち清むを爲す。王便ち清水を得て之を飲まん。那先の言く、人心に五惡有るは濁水の如し、佛の諸の弟子、生死の道を度脱し人心清淨なるは珠の水を清ますが如し、人諸惡を却け誠信清淨なるは明月珠の如し。

王復た那先に問ふ。精進誠信とは云何。那先の言く、誠信を行すれば便ち度世の道を得ん。譬へば山上の大木の如し、其の水、下流廣大にして雨澤の人俱に水の淺深を知らず。畏れて敢て前まず、若し遠方より人の來るあり、水を説て過かに水の廣狹淺深を知らず、自ら力勢を知り、能く水に入つて便ち過かすことを得て去らば、兩邊の人家便ち後に隨つて渡り去らむ。佛の諸弟子も是の如し、善心に精進して道を得るものも是の如し。佛經に説くれば五所（眼耳鼻舌身）の欲を知り、人自ら身の苦樂（四苦八苦）を知れば能く自ら度脱せん、人皆智慧（人身觀）を以て其の道徳を成す。

て該費とか謝禮とかの御禮遣は御無用です。唯その時の都合でお宿か食事をお願いするかも知れませんが、一切家族的にして信仰増進を希むたいのです。戦力増強も正信力より發る。「信は道の元」「一切の行は信を以て首と爲す善徳の根本なり」矣。

一 部 金 二十錢	送料 二錢
半 部 金 一 十 錢	送料 共
一 部 金 一 十 錢	送料 共
昭和十九年五月二十七日	印刷納本
昭和十九年六月一日	發行
東京都小石川區香羽六ノ十七	
編輯 磯部 滿 事	
承 發行人 磯部 滿 事	
會 社 東京都四谷區內藤町一	
出 版 印刷人 山田 英 二	
本 東京都小石川區香羽町八ノ十一	
日 野島好文堂印刷所	
東京二〇五二	
東京都神田區淡路町二丁目九番地	
配 給 元 日本出版配給株式會社	
東京都小石川區香羽町六ノ十七	
發行所 統	
電話 牛込五三三六番	
振替 東京九四二〇〇番	
會 員 香 號 二二〇〇一〇號	

佛法を信するといふ意味合は、因果應報の理を信するのである。一番大事な語はそこにあるのであつて、佛法を信じないといふことは因果應報の理を信じないのである。因果應報の理を信じないといふのは、悪い事をしてそれがどういふ風に報いて来るといふことを考へない、善い事をしてその善根功徳の報ひがどうなつて来るかといふことに、悦びも有たなければ何等の感じも有たない者が、佛法を信じない人と言ふのである。佛法を信するといふことは、その善なり、その善なりがその人の一生に終るものではなくして、永遠に己れを引いて行く、業の力といふものの恐るべき事に徹底して觀念が説明されて居るのを佛法を信じて居る人といふのである。佛法を信するが如く見える僧侶信者にして業の力を信じない者は、それは偽者である、佛法を信じては居ない。その業の力を確信することに依つてそこに強い活動が現れて来るし、又悦びが現れて来るのである。

それ故に法華經の開經には、この經を修行して居れば、如何に因果應報の理を信じなかつた者も次第々々に心が解けて、その善の尊むべく、惡の恐るべき事を知つて、一々自分の行爲に省みて、今日は善い事をした、これは有難い事である、少々辛い事もあつたり、暑い事もあつたけれども、今日は功徳善根を積んだ、今日は斯ういふ事で時間を費し、金を使つたけれども、それは無駄事ではなかつた、芝居を観て使つた錢はその悦びと共に消えてしまふけれども、善根功徳の爲に使つたものは永遠にそれが幾倍されて自分に幸福を將來するものである。ちようど貯金したといふか、非常な利廻りの良い所に信託したやうなものであるといふ意味がハツキリとわかつて来るのである。それが宗教の爲に一圓の錢を使つたのも、活動寫眞を見て一圓の錢を使つたのも同じやうに思つて、「アア、今日は一圓損をした」といふ風に考へて居る間は、これは佛法を信じて居ない人の心理状態である。同じ努力でも時間でも金錢でも、その爲して行く行爲に對して、今日は善い事をした、善根功徳の方に向つて注がれたといふことが悦びとなり、どこまでもそれが自分の思想觀念を導いて行く力であれば、それが佛教を信じて居るといふことナンである。

ところが東京の人にはそれがなかなか出来にくいのである。東京の人は路傍に立つて天麩屋を食ふとか、麵を食ふとかいふので、腹んで食つた時には「アア美味かつた」と言ふけれども、それでモウ後も前も無い、そこに饑餓觀念といふものが無いのである。宵越の錢を持たぬといふやうな事も、自分の備いた今日の努力を翌日に續けて行くことを知らない、今日の金錢は今日使つてしまふ、「明日は又明日ぢや」といふのであるから、生涯を貫いて自己の行爲を批判する力も無く、況んや永遠不滅の魂の行末などといふことは少しも考へない、却つてさういふ事柄に就ては從に放言漫語すれば宜いと思つて居る。「ナニ地獄へ行つた方が面白からう、極楽ナンか上野の花を見れば澤山だ、あとは地獄でちつと苦しむ思ひをするのも面白からう」などと言ふ。さういふ貪婪と言ふか、譯のわからぬ漫語を放つことを東京の人は非常に氣が利いたやうに思ひ、又えらい事のやうに思つて居る。だから風呂に入つて快い心持になつても浪花節は唸り出すけれども、本當に精神的に「南無妙法蓮華經」と唱へるやうな人は無い、人間は自然に快い心持になつたならば宗教感情が動いて来るものであるから、そこに「南無妙法蓮華經」と言ふなら宜いけれども、さういふ場合にも直に今の漫語で「南無妙法蓮華經」などと言つたりして、純潔なる宗教感情といふものをこまかしてしまふのである。

どうしても業の力を確信することが佛教に於ては大事なことである。だから結經には「深く因果を信じ」とある、同じ因果を信するにも深く信じてはいかぬ、どこ迄も徹底的に因果應報の理を信じて、それが自分の思想觀念を支配するやうにして行かなければならぬ、それが出来ないのはやはり野蠻氣質であつて駄目ナンである。どうも壽司の立食をするやうな輩の頭腦にはその觀念は植附けにくいものである。未來はどうでも構はぬと言ふ、ちようど無盡に入るやうなもので、先はどうならうとも早く歸に當れば宜い、他人が當つたならば「俺の方に廻して呉れ、三百圓のものを二百六十圓で宜い、俺の方に廻して呉れ」、「イヤ俺は二百三十圓で宜いから俺に呉れ」……さうして先に使つてしまふ、後はどうなつても構はぬ。算盤を執つて見たならば非常な損である、二百三十圓買つて三百圓拂はなければならぬのだけれども、そんな事は構はない、何でも先を争うて「早く俺に呉れ」といふ譯で、非常に計算上不利な事でも無事ナンといふものが流行る。これがだんだん財産も出来て堅い人になつて来ると、利廻の良いといふ貸家などを造つても、火事に遭ふ事もあり、家賃が停滞する事もあるから、これは公債を買つて置かう、或は確實な信託會社に預けて置かう、少々計算は不利な事でも先づ確い所へ……と心掛ける、さうしてこれを何時でも引出せるやうにして置くといけなから、或べく引出せないやうにして置いて財産を殖やさうといふやうにだんだん堅固にやる。功徳善根の觀念もやはりそれを同じやうなもので、目前の幸福を無暗に放棄めなないでその悦びが最後に至つてどこまでも鞏固な幸福を持来るやうにといふことが佛法の信念ナンであるから、それは深慮いた善い者に相違ないのである。

そこでその業が絶対の力を有つといふことを信するものが佛教である、それは神様と雖も業なり法なるの前提にはどうする事も出来ない。婆羅門教あたりでは婆羅門の神に詣つてさへ置けば、ちようど今の人間が國慶日の前に賞錢を上げに行くやうに、「私は悪い事をしましけれども、今お賽錢を上げて置きますからどうぞお柔軟に願ひます、どうぞあなたのお所へ引張られて来ます、能く顔を見せて置いて下さい、今日は着役してお賽錢を上げて置きますから……」斯ういふ風にやつて置けば、いよいよ自分が國慶日の前に引張られて来た時分に、「後叙は賽錢を五圓置いて行つた奴だナ」といふので、特別に特典を與へられると考へて居る。婆羅門教に於てはちよう

どさういふ風な事をやつたのである。それが昂じてお茶碗を上げるとか煙燭を上げるとかいふことが盛になつて来た。だからその場合には高い煙燭を平気で買つて居る、一錢ぐらゐの煙燭を五錢で賣る、高いとは思ふけれども、どうせこれは國體様に頭腦を使ふ賄賂場だといふので、平気でそれを買つてガランガランとやつて居る。東京でも今四谷に太宗寺といふ大きな國體様のあるお寺がある、品川にも妙國寺の直ぐ隣りに國體様といふのがあつて、ガングン叩いてやつて居る。さういふ人間は國體様に何を頼みに行くのでもない、自分は悪い事をするにきまつて居る、だからあなたの所に引出された時分に、何とか特別の扱ひをして貰ひたいといふことを頑強に思入居るのである、お釋尊様はそれを赤膚に攻撃されたのである。若しそんな事をすれば、國體大王と雖も因果報の理の前には一たまりもなくやられてしまふといふことを説いたのである。因果報の理を狂げて、此奴は悪い事をした者だけれども、賽銭を餘計上げたから一つ特別に扱つてやらうといふやうに、國體の大規律といふものを狂げたならば、その國體の手は直に捻折られてしまふといふことを説いたものが佛教である。佛教の教化はそこに偉大なるものがある、釋尊は尚くまでも業の力を説いて、最後法華經に來つても即ち因果報の理に依つて妙法蓮華經と稱せられて居るのである。お目我偶の中にも『惡業の因縁をもつてのゆゑに阿僧祇劫を過ぐれども三寶の名を聞かず』と言ひ、或は『久しく業を修して得る所なり』といふやうに屢々説かれて居る、妙法蓮華經の『蓮華』といふ語はこの法と業を意味するので、即ち蓮華と稱せられたものが法華經である、これが佛教の大原則である。

その大原則から考へて一切を割出して行くことになれば、どうしても目前は少々辛くとも、そこに功德善根が積重ねられて行くといふことを心掛けなければならぬ、その心が強い道義活動を導くのである。今の所は辛いやうだけれども、正法に與し、正法のお手傳ひをすれば斯ういふ功德になつて、その結果は斯ういふ幸福が現れて來るといふことを信する爲に護法の善根が出来るのである。それは、どんな偉い人でも、宗教の爲に信仰を捧げ、或は迫害困難と闘つて行くといふことは、この善根功德の觀念に刻蝕されて居るのである。日蓮聖人が佐渡ヶ島に流された如きは最も苦しい事である、寒い所に食物も無い、實に今から想ひやるだに恐しい事である。塚原三味堂といふのは山の麓の墓場である、田舎で言へば三味堂といふのは焼場であつて、石が積んであつて、人が死んだ時分に焼いて、そこに小さな墓を建ててある、その焼場の傍に一間四面の薬小屋といふのであるから、實に粗末な灰小屋みたいなものがあつた、その内に入られて居る、雪は降り積つてその小屋よりも高いくらゐになつて居るから、全く雪の中に閉籠められて居るのである。流された時が十一月であるから、佐渡ヶ島の舊曆の十一月と言へばモウ雪は盛に降つて居る、それがだんだん降り積つて全く雪の中に閉籠められた。さうして少しもその寒さに耐へるやうな準備をして居る譯ではない、今日ならばどんな犯罪者でも食物を與へないといふことはない、又蒲團も與へるのであるけれども、その時分の流罪は島に流したそれきりで、何等の準備もしてない、さうしてこれは罪人だと言つて皆に諒がらされて、島の者は往來もしないやうにしてしまふのであるから、モウ流されたならば、その人間は殆ど餓死してしまは

なければならぬやうに出來て居る。さういふ苦しい生活であるから、日蓮聖人のお言葉にも『當時の責は堪へるけれども』と言はれて、實に佐渡ヶ島に於ての寒苦は堪へられない有様であつた。『齒がみをなして』とあるから、その雪の中にギリギリと齒を齧んで耐へて居るけれども、堪へられないくらゐの苦しみである。併ながらその堪へられない苦しみに耐へる力は何處から出て來たか、即ち日蓮聖人は

『當時の責は堪へるけれども、未來の惡道を脱すらんと思へば悦びなり』

と仰せられて、實に堪へられどもこれを耐へて居れば、それに依つて未來に惡道に墮らるといふことも無く、却つて佛様に成れるといふ、永遠の生命の幸福を感じて來るから、この肉體は凍えて死んでしまはうとも、その奥の魂は榮え行くものであるといふので、堪へるけれどもない責を耐へられた譯である。

それが本當の宗教の力である。ところが多くの人達にわからないのはそこである。土工などを使つて見ると直ぐわかる、『能く働いたならば今日は二十錢増してやるぞ』斯う言つただけではまだ本當に働かない、やると言つたら嘘は言はないのだけれども、それでは當にならぬと思つて居る、『午後になつたらやるから』と言つてもその二十錢がなかなか效能が無い、『チア比處に二十錢置くぞ』と言つて目の前に置いてやりさへすれば、二十錢だけ餘計に働く、それは實に幼稚なものである。さういふ頭腦では、日蓮聖人が雪の中で『當時の責は堪へるけれども』と言はれたやうな心理状態は到底わかりはしない、そんな氣の長い事は御免蒙るといふことになる。近來の教育を受けた人でも、今の教育といふものは宗教の感情を棄てて居る、宗教感情といふよりは實は哲學的思想を棄てて居るのである。ただ目前だけの事を考へて行くから實に淺薄な人間ばかり出來て居る。唯物主義といふやうなものはただ食つたり飲んだりするばかりでない、すべての考が薄つべらになつてしまふ、ちやうど泥棒などをやる者が唯物主義の根本である。ただ子供が可愛いからと言つて美しい着物を着せて芝居を観にやるとか、或はお琴を習はせるとかして置けば、それで子供の幸福だと思つて居るけれども、人生五十年去つて見れば一瞬の如きものである。現在が大事だと言ふけれども、それは洵に短かいもので、過去つた方から考へれば實に人生は夢幻の如きものである。これは洵に謙な事であつたにほしくないけれども、併し事實がさうである、これを幻でないと言ふ方が嘘である、生れてから死ぬまでの間にはいろいろの事が起るけれども、過去つて見たならば、あれも一時、これも一時、バツと現れてヌツと消えて行く、實にその有様はシヤボン玉に異ならぬものである。最後になつて考へたならばどうしても宗教の本當の信念、それだけしか残らない、併しさう言つてしまふとあまりに現在が激しくなるから、まあそこに現在の生活にも相當の意義を與へて、法華經は現在生活を教ふのであるけれども、本當の考へ方から行けば、やはり人生といふものは生死無常の有爲轉變の有様である。法華經の尊勝品に、子供が玩具に氣を取られて床の下に火が通つて居る宅で遊んで居ると説いてあるが、それはあの通りのものである、法華經

を信じたからと言つても、やはり人生は火宅のやうなものである。

新様にして洵に人生といふものは一面儚いものであるから、これを統一的に考へて行けば、人生の事は人生の事で力を盡して行くけれども、それが全部ではない、どうしても一番最後は滅びざる生命の前途を考へなければならぬ。死んだ先といふ語は言ひ方は面白くないけれども、即ち自分の永久の生命である、何も死んでから先ではない、今から獲いて居る永遠の生命である、生命は永久に續いて居るので、肉體の方が續かないのである。そこで生命の永遠なるものに就て人間は考へて置かなければならぬ、さうするとこの肉體は灰になつて行くものである、身の方は生きて居る間は綺麗にして置かなければならぬ、風呂にも入り白粉もつけるが宜いけれども、これは結局灰になつてしまふ。灰にならない永遠不滅の魂を大事にしなければならぬ、それが本當の話である。どんな美しい櫻梅の人でも、死ねばそれきり見られない醜い姿になつてしまふ、いつ迄も美しくして置かうと思つても決して置けるものではない。生きて居る間は大変美しい人だなと思つた人でも、死んで見るとスツカリ肉が落ちて色も悪くなつてしまふ、三日も経つて見たならばその様子は到底見られたものではない、生きて居ればこそ人間の顔には相當色艶があつて見られるのである。それは震災の當時に最も能くわかつたので、隅田川邊りに澤山死んで居る人を見たが、どれもこれも實に穢ない、綺麗な女といふやうな者は一人も無い、皆萎の影れたやうな恰好をして、色もちやうどあんな風にどす黒い色になつて居る、一人として見られた者は無い。振返つて陸の方を見ると、生きて歩いて来る女は、どんなに色が黒くとも、鼻が低くとも、やはり眼はチヤンと光つて居るし、何處となく色艶もある、そこに死んで居る方は一人として見返るやうな者は無い、夢の死んだのと同じ事である。實に人間は死んでしまへばくだらない、つまらないものである、魂が入つて歩いて居ればこそであるといふことをその時に自分は痛切に感じた。普通の場合には、この女が美しいとか醜いとか言つて贅澤な事を言ひ居つたけれども、死んだ人間を見ると、生きて歩いて居る女といふものは皆これ美人なりと言ふことが出来る。併し魂はこの醜い身から離れて永遠に存在して行くのであるから、どうしてもこの滅びざる生命に對して本當の考を有つて行かなければならぬ。それが所謂佛教の因果報の理——業を大切に思ふ精神になるのである。

### 孟蘭盆報恩會施行

來る十六日日曜日午後一時半 於本部法要及講話可相替候間御繰合御參詣相成度候

○警報發令の節は中止

財團法人統一團

### 立正安國論講

小林一郎

正しい教が行はれない國はモウ災難の絶え間はないといふことが、仁王經、藥師經、大集經(原文御書之往照)といふやうな類のお經の中に繰返し繰返し述べられて居るのであります。それであるから日蓮上人が自分が勝手なことを言ふのではない、お釋迦様のお説きになつた經典の中に、正しい教の行はれない國は天災地變等があり、それでもまだ國民が覺醒しなければ外國から攻められたり、内亂が起つたりするといふことがあると言つて居るのであります。

夫れ、四經の文相かなり、萬人誰か疑はん。而るに盲瞽の輩、迷惑の人、妄りに邪説を信じて、正教を辨へず。故に天下世上、諸佛家經に於て、捨離の心生して、擁護の志無し。仍て、善神・聖人、國を捨て所を去る。是を以て、惡鬼・外道、災を成し難を致すなり。

それでこの四つの經、即ち仁王經、金光明經、藥師經、大集經にあるお經の文はモウ明かなことで、誰でもこれは疑ふ者はない。これは後世の者が作つたのではない。佛様のお言葉を書いたものなのであるから、これを疑ふ筈はない。「而るに盲瞽の輩、迷惑の人」即ち本當にどういふ教が正しいのか見分けのつかないやうな人間が、濫りに邪説を信じて正しい教を辨へない。それであるから「天下世上」世の中の人が佛様の本當のお心を備めて説

かれたお經を却て「捨離」する。捨て離れて、さういふ教を信じないやうになる。また「擁護の志無し」正しい教を守つて世の中に弘めようといふやうな心持もない。それであるから國を護るところの神様も捨ててしまふし、勝れた人も捨ててしまふ。そこで「惡鬼外道」といふやうな國に禍ひを爲す者がますます跋扈して来る。またその國に隙間があるのに乘じて外國も攻めて來るであらうし、内亂も起つて來るであらう。斯ういふことをいろいろな經典に就て比べて見ると、教を正しくするといふことをしない、ただ御祈禱をして見たりなどしても、決して國の災難は拂へるものではない。皆の心持を根本から直さなければ、國の災難といふものは除かれるものではないといふことをいろいろな經典に基いて説かれたのであります。

ここはまだ法華經が最も勝れた經であるといふことは言ひ出しませぬで、ただ世の中の災難に就て、斯ういふ災難があるのを以て見ると、國に善い教が行はれないであらうといふことだけを極く大體に於て言つたのであります。それから更に問答を重ねまして、佛様の教といふものは法華經が絶対のものである。殊に末法の世、世が末になつて人の心が險惡になると、尋常一様の教ではなかなか人の心の迷ひを根柢から拂ひ去ることが出来ない。それにはどうしても法華經を信ずるといふことでなければならぬといふことをだんだんに言つて來るのであります。以上で第二段の問答が終りまして、その次に第三の問答に入るのであります。

客色を作して曰く、後漢の明帝は、金人の夢を悟りて、白馬の教を得、上宮太子は、守屋の逆を誅して、寺塔の構へを成

す。爾より來、上一人より下萬民に至るまで、佛を崇め經卷を專らにす。然れば即ち、觀山・南都・園城・東寺、四寺一州五畿、七道佛經星のごとく顯り、堂宇堂のごとく布けり。賢子の族は、則ち萬頭の月を觀し、勳勳の流は、亦鷲足の風を傳ふ。雖か一代の教を稱し、三寶の跡を廢せりと謂はんや。若し其の證あらば、委しく其の故を問かん。

そこで話を聞いたところのお客が「色を作して」といふのは、非常に憤慨したやうな様子で、日本全國に寺などが澤山あるのに、佛教が廢れた廢れたと日蓮上人が仰しやるものでありますから、これは怪しからぬことを言ふといふので、顔色を變へて言ふには、今佛教は廢れたとあなたは言ふが、決して佛教は廢れて居ないのである。佛教は印度から支那を通じて我國にまで傳はつて居る。支那の後漢の明帝といふ人が、夢に不思議な人が現はれて、身體から黄金の光を放つたといふので、夢が覺めてから、自分の臣下に占はせたところが、それは西の方の印度に勝れた人があつて、その教が支那に弘まることゝ徴であるといふことを言つたので、支那から臣下をやつてその教を求めさせたところが、印度の方からも支那に佛教を傳へようといふので人が來て、支那から行つた人と、向ふから來た人が途中で出會つて、打連れ立つて支那に歸つた。それが支那に佛教が傳はつた初めであると言はれて居るのであります。その時に白い馬に經典を積んで印度から來たので、その白い馬の經典を下ろして、そこにお寺を建てたのが白馬寺だといふやうな言ひ傳へもあります。これはまあ支那に佛教の傳はつた由來を言つたのであります。

は御利益本位ではないけない、人間の心を建直さなければいけぬ。人間の心に迷ひがあつたならば、他から幸福を附與されてもその幸福は幸福にならない。金があつても、地位があつても、勢力があつても、心に迷ひがあれば決して幸福にはなれないのである。佛教といふものは人間の心をスツカリ生れ變らせるものである。それであつて本當の佛教である。併しながら初めからなかなかさういふことは解らない。初めは信心といふものは御利益本位である。今でもさうですが、何か御利益を本にする。だんだんそれが深入りして行くと、金や勢力や地位では人間の幸福は興へられるものではない。心の煩惱を除いて生れ變つた者にならうといふことが解つて來る。これは餘程進んでからであります。それで佛教が日本に傳はつた初めもやはり御利益本位で、佛様を拜めば幸福が得られるといふやうなことで弘まつた。欽明天皇の時に佛教が弘まつてから二十数年経つて、聖德太子の時になると、聖德太子は本當に人間の心を建直す爲に佛教をお弘めになつた。だから日本の佛教は正しい意味に於ては聖德太子に始つたと言つて宜しいのであります。「三寶に歸せんば何を以て狂れるを直さん」と聖德太子の經法第二條にはあります。人間の心の曲つて居るのを眞直に直すのが佛教である。他の教では駄目である。教といふものはいろいろあるけれども、佛教といふものが一番勝れた教であつて、この佛の教に歸依しなければ人間の心の曲つたのは直らないのである。だから佛教を弘めるのであるといふので、決して御利益を願ふとか、一身一家の幸福安寧を祈るといふことが本筋ではない。聖德太子は一度もさういふことを仰しやらない。人間

それから日本では「上宮太子」即ち聖德太子が「守屋の逆を誅し」守屋が佛教を排斥したのみならず、謀叛をしたので、守屋を誅戮して、佛教を我國に弘め、寺を建て塔を建てるといふことに力を盡した。これは我國に佛教の弘まる初めでありました。ここは日蓮上人の卓見でありまして、日本には聖德太子の時に初めて佛教が弘まつたのではない、これは前に朝鮮と日本と交通をして居る間に何時の間にか百濟から我國に佛教が弘まつて來たのであります。何時といふことは無論ハッキリ判らない、朝鮮と日本とは始終往來して居りましたから、何時の間にか佛教が弘まつた。それで日本でも大分佛教が弘まる見込がついたから、それで欽明天皇の十三年に百濟の聖明王といふ王様がわざと國として使を寄越して、お釋迦様の像とお經と幡蓋とを獻上した。併しそれよりもズット前にモウ民間には弘まつて居つたわけでありました。モウ大丈夫であるといふ見込が付きまして、欽明天皇の十三年に百濟から佛教が傳はつたのであります。ところが百濟の聖明王がお釋迦様の像や、お經を日本の朝廷に獻上致すに就て、随分長い手紙を添へてあります。その手紙の全文は日本書紀にあります。この百濟の聖明王から寄越した手紙を見ますと、佛教に依つて人間の心を建直すといふことはまだ言つて居ない。佛を信すれば利益がある、自分の望みが達せられるから、佛教を信するが宜からう。支那でも朝鮮でも佛教を信すると非常に利益があつたのであるから、日本でもこれを大切になさつたら宜からうといふことが言つてあります。即ちまだ本當の佛教ではないので、これは幾度も申すこととありますが、本當の佛教といふもの

の心をスツカリ建直すのだといふのですから、聖德太子の時に至つて初めて佛教といふものが正しい佛教になつた。僅か二十年ばかりでありましたけれども、太子が勝れた方で居つしやいましたから本當の佛教が日本に弘まつたわけでありました。それで上宮太子よりもつと前の欽明天皇の時のこともあるし、それよりもつと前にも佛教は弘まつて居るけれども、そのことを言はれないで、聖德太子が日本に本當の佛教をお弘めになつたといふことが言つてあるのであります。

それで「爾より來、上一人より下萬民に至るまで」即ち上下一同に佛教を崇め、お經を大切にしました。そこでいろいろお寺も澤山出來て「觀山」といふのは傳教大師の開いたもので、「南都」即ち奈良にはズットそれより前から六つの宗が繁昌して居ります。「園城」といふのは三井寺で、「東寺」といふのは、弘法大師が朝廷から賜つて眞言宗を弘める道場とした所であります。さういふやうな寺も奈良朝から平安朝に入つてだんだんと出來た。「四寺一州」モウ日本中「五畿七道」隔から隔までお經といふものは星の如く通り、お寺とか塔の建築も雲の如く澤山になつた。さうして世の中には佛教を弘める爲に力を盡して居る者も随分多いのである。「賢子の聲」といふのは舍利弗のこと、「舍利」といふのは印度の言葉、つまり梵語でありまして、譯すと「賢」といふ字になる。「弗」といふのは子のこと、この舍利弗のお母さんが大變眼の美しい人であつた。「賢」といふのは驚のやうな鳥でせうがその鳥は大變眼が美しい。舍利弗のお母さんは非常に眼が美しい美人であつたので、この人を世間の人が非常に美人と言ひ難やし

た。その人の子であるから、それで舍利弗、即ち「鶻子」眼の美しい人の子と言つたのであります。法華經を讀んで見ると、舍利弗は智慧第一と言はれて、お羅漢様の十大弟子の中に於ても殊に勝れた人でありました。そこで「鶻子の輩」といふのは、舍利弗のやうな智慧の勝れた僧侶といふことで、日本にも非常に勝れた坊さんが澤山居て教を弘めたといふことを形容したのであります。

「鶻頭の月」鶻頭といふのは靈鷲山で、お羅漢様が法華經を説かれた所で、印度では殊に大切な所です。「鶻頭の月を觀する」といふのは、佛の大乗の教をよく究めてこれを世の中に弘めたこととであります。「鶻勸」といふのは、印度に出て大乗の教を弘めるのに力を盡した人でありました。「鶻足」といふのは、お羅漢様のお弟子の中で舍利弗などと相違んで居つた迦葉といふ人が鶻足山といふ山に居つて、そこで多勢の人を集めて教を説いたのです。ですから「鶻足の風を傳ふ」といふのは、迦葉以來傳はつた大乗の教を世の中に傳へるといふことであります。これは佛教が日本に非常に盛んになつて来たことを申すので、ただそれを形容しただけのこととあります。それで必ずしも舍利弗の流儀とか迦葉の流儀が弘まつたといふわけではないのであります。大乗の佛教が日本に弘まつた、だからそんなに正しい教が世の中になんなどといふことは怪しからん話である。非常に佛教が日本には弘まつて居るのではないか。それであるのに一代の教を馬鹿にして、「三寶の跡を廢す」佛も、佛の法も、佛の法を傳へる人も居なくなつたなどと言ふのは、これはドウも途方もない話であつて、そんなことはドウも納得が出来ない。併し證據があるならば何に基

いてさういふことを言ふのか、それを聴きたいものである。斯ういふ疑問を起しました。これに對して日蓮上人が更に御自分の意見を説かれるのであります。

主人諭して曰く、佛國を連ね、經藏軒を並ぶ。僧は竹葉の如く、侶は稻麻に似たり。崇重年壽り、尊貴日に新なり。但、法師は詔曲にして、人倫を迷惑し、王臣は不覺にして、邪正を辨ずること無し、

主人即ち日蓮上人が言ふには、イヤ、佛教が盛んであるといつて、形だけいくら盛んでも仕様がなない。それは「佛國」お寺はモウ變を連ねて澤山ある、またお經も澤山ある、さうしてお經を讀ふところの葉が軒を並べるやうに澤山ある。僧侶は竹葉の如く、稻麻の如くに澤山ある。即ち竹や草が生えて居るやうに、或は稲や草が生えて居るやうに非常に多い。今の世には僧侶の数は非常に多い。また世間の人も坊さんを「崇重」非常に重んじて居る。長い年月の間坊さんといふものは大層尊敬を受けて居る。「尊貴日に新なり」毎日々々人々が僧侶を尊敬する風が一層盛んになつて来る。それであるから成程形の上から言へば寺も澤山あるし、お經もあるし坊さんの数も多いから、盛んに佛教が弘まつて居る國のやうに見える。

併し「法師は詔曲にして人倫を迷惑し」詔曲といふのは、「詔ひ曲げる」と書いてあるけれども、人に詔ふことだけを言ふのではない、「詔」といふのは理窟を曲げること、所謂こじつけること、それが詔曲であります。正しい教を曲げて解釋する、それが詔曲であります。人に詔ふことだけ言ふではありません。吾々

は自分で自分に詔ふ。自分の都合の好いやうに理窟をくつつ付けて居る。それが詔曲なのです。よく何事でもさういふ風にやるものであります。吾々が學生時分に學校を休みたいなどと思ふと、「ドウモ第一今日は気分が變だ、頭が痛いやうだし……」などと五六遍も言ふと、本當に痛くなつて来る。だから「今日は頭が痛いから休まう」といふことになる。自分の都合の好いやうにこじつけてやる。これが詔曲です。決して人に詔ふだけを言ふのではありません。自分の宗旨を繁昌させる爲には教を曲げても構はぬといふやうなのが詔曲であります。僧侶にだんだんさういふのが多くなつて来たといふのであります。自分の宗旨の繁昌ばかりを考へて、佛様の御本意に背いたやうなことを平氣で世の中に弘める者が多くなる。さうして「人倫を迷惑する」多勢の人に間違つたことを説いて迷はせる。また「王臣不覺にして」寺を保護するところの身分の高い人、武士とか、お公卿様とかいふやうな人が皆考へ足りないで、どういふ教が正しいのか、どういふ教が間違つて居るのか、その邪正をハッキリ辨へることが出来ないのである。

仁王經に云く、「諸の惡比丘、多く名利を求め、國王・太子・王子の前に於て、自ら破佛法の因縁・破國の因縁を説かん。其の王別へずして、此の語を傳聽し、横しまに法制を作りて、佛戒に依らず。是れを破佛破國の因縁と爲す。」

以上のやうなことは昔から例があるので、仁王經の中にもさういふことは言つてある。「比丘」即ち出家の人の中に「惡比丘」がある。惡比丘といふのは、悪い事をするといふやうな簡單な意味ではない。惡比丘といふのは、佛の正しい教を差指して、モツ

ト低い淺はかな教を弘めることに力を盡して、それで自ら足れりとして居る者、これを惡比丘と言ひます。これはいけないのであります。本當に佛の教を世に弘める人は、佛の心持を自分の心持としなければならぬ。だから自分が一生懸命になつて研究して佛様の御趣旨をシツカリと突き詰めて、これを世に弘めなければならぬ。自分の骨折が足りないで、佛の教を宜い加減にして、これを世の中に弘めるとすれば、人を害する積りはなくとも世の中の人をどれ程迷はすか判らぬ。さういふ者を惡比丘と言ふのであります。惡法師とか、惡比丘とありますのは皆その意味であります。だから極樂寺の具親などは随分品行も方正でありまして、慈善事業などを起して孤兒を養つたり、養老院を作つたりなどして居るけれども、日蓮上人はこれを惡人と言つて居られる。これは普通の惡人といふ意味ではない。モツト本當に研究しなければならぬ。末の世になつて来れば、法華經のやうな教でなければ弘まらぬ。それであるのにこの大切な教を差指して律などといふ極く低い教を説いたから人を迷はす者である、世の中に害を興へる者であるといふのです。だから自分では悪い事をする積りはなくとも、人を惑はすことになる。結局世を害するのです。日蓮上人が良觀のことを惡人と言つて居られるのはそこで、教を世の中に弘める大責任があるから、宜い加減なやり方をしてはならないわけでありました。今ここに言ふ惡比丘といふのもさうであります。必ずしも惡人ではなくて、佛の本當の御精神を辨へないで間違つた教、或は淺はかな教を世に弘める者はみな惡比丘と言ふべきであります。

さうしてその惡比丘が「多く名利を求む」さういふ者に限つて名譽が欲しい、地位が欲しいと思ふ。さうして國王とか、太子とか、王子とかの前に於て「自ら破佛法の因縁、破國の因縁を説かん」正しい佛法の弘まる害をするやうな教を説く、或は國の發展の妨げになるやうな教を説く。「因縁」とは斯ういふ所では教のことでありませう。佛の御本意に背いた教、或は國に害を興へるやうな教を説くことがある。その時にその教を國の王が「別へず」よく分別が出来ないで、さういふ間違つた教を聞いてこれを信じて、さういふ教に基いて「横しまに法制を作り」國の法律の立て方が間違つて行く。印度の昔では、國王が聖人、賢人といふやうな人の説を聞いて、その説に基いて國の法律制度を立てるといふ習慣でありませうから、さういふ間違ひが本になつて、國の法律制度なども人民を眞に幸福にしたり、人民を眞に教へ導く力の無いものになる。さうして「佛戒に依らず」佛様の戒めに依らないで間違つた法律を立てる。さういふことになる。破佛破國の因縁」佛教も廢れるし、また國も衰へて行く本になるのであります。

斯ういふことが仁王經の中に言つてある。だから佛の教を弘める人も大責任があるし、また國王とか、政治家とかいふやうな人は、人民の生活が本當に幸福になるやうにしなければならぬのであるから、さういふ點から言つても大變な責任がある。その責任を完全に果さない國が衰へたり、或は甚しくなれば外國から攻められて亡びるといふやうなことになる。何と言つても教が大切であるといふことが仁王經の中に言つてあるのであります。涅槃經に云く、「菩薩、惡象等に於ては心に恐怖すること無

かれ。惡知識に於ては、怖畏の心を生ぜよ。惡象の爲に殺されては、三趣に至らず。惡友の爲に殺されるれば、必ず三趣に至る。」

それから涅槃經の中に言つてあるのに、「菩薩」といふのは、大乘の教を學ぶ者といふ意味。大乘を學ぶ者は象が暴れて來ても衆の暴れて來るなどはそんなに恐ろしいと思はないでも宜しい。それよりも「惡知識」間違つた教を説くやうな者に對して「怖畏の心」といふのは、これは實に恐ろしいものだと思はなければならぬ。何故ならば象がどんなに狂暴なもので、象の爲に踏み殺されたところがこの世の命が亡くなるだけである。「三趣」といふのは、地獄、餓鬼、畜生で、地獄に墮るとか、餓鬼道、畜生道に墮るやうな害は受けない。ところが「惡友」これは惡知識と言つても同じことで、間違つた教を説くやうな人の爲に殺されるといふのは、間違つた教を聞いたまま一生を終ることで、必ずしも殺されないでも宜しい。さうすると「必ず三趣に至る」地獄に墮ち、餓鬼道に墮ち、畜生道に墮るといふやうな恐ろしい差ひが心に生じて來て、モウ後で迷ひを除かうとしても、なかなかそれは出來ない。間違つた教を説く人といふ者が實に恐ろしいものであるといふことが涅槃經の中に言つてあるのであります。

### 孟蘭盆報恩の月

#### 磯部滿事

天地の間、父母無きの人無し、其初め胎を受けて生誕するより、生長の後に至り、其恩愛教養の深き、父母に若く者莫し。能く其恩を思ひ、其身を養ひ、其力を竭して以て之に奉へ、其愛敬を盡すは、子たるの道なり。故に孝行を以て人倫の最大義とす。

これは明治十四年初夏、元田侍講が、長くも聖旨を奉じて幼童のために人としての大道を示教すべく「幼學綱要」なるものを撰された劈頭第一の文である。

人は幼い時の教養が最も大切である。そして其の教育の要領は本末を明かにする所にある。そこで先づ根本の道徳から培かつて次第に知識に及び、漸次事業に着手すべきが順序である。處が其後歐米の華々しい文化に魅せられて科學萬能となり、知識の追及に日も足らぬ程で本末を顛倒してしまつたから、宗教、道徳を忘れて、自我であるとか、民衆的といふやうな事を主張して、名利の念に強く、忠孝仁義などといふのは舊思想である。今は親子より夫婦が家庭の中心であり、子供が本位であるといふやうになり、我が三千年來無比の國體の美風を弊壞の如く見捨てんとするに至つた時、奇しくも大きな鐵錘が下されて、ここに道義の狂歌が燃えあがつたのであつた。而かも一度汚れた白布の黒汁は容易に純潔とならぬやうに、今後は因果を無視して自己本位であつた

り、道義を紊亂して慈母を度したり、老人は邪魔であると昔しの棄老國を儆戒する者もあるが、これで果して正義の戦力増強が期し得らるであらうか、これで果して天祐神助が下るものであらうか。當局は敬神崇祖を強調されて居るが、人々の實行は果してどうであるか。今月は一年一度の祖先追孝の孟蘭盆報恩會に相當するので、謹て聖旨を拜して感激を新にする次第である。

本文は平易であるから別に註釋の必要もないと思ふ。人は先づ恩に感ずること、即ち毎日常家の内では親の恩に感ずる處から出發し、一歩出でては國家社會の恩に感ずるといふ所に進み、更に天地三寶の恩を感ずるのである。而してこれに報ゆる所に徳を構成し、人倫の根本がある譯である。即ち知恩報恩こそ人の人たる所以である。だから忠義といふのも唯だ一つの忠義ばかりに止まるのではない。それを通して一切の徳性を實現して行く方法である。孝行といふのも唯だ一つの孝行ばかりに止まるのではない。それを通して一切の徳性を實現して行く方法である。根本は一つであつて應用は盡十方無邊であることを思ふ。されば孝經には。

夫れ孝は徳の本なり、教のよつて生ずる所なり。と示され、又禮記には  
居處莊ならざれば孝に非ざるなり、君に事へて忠ならざれば孝に非らざるなり、官にのぞんで敬ならざれば孝に非らざるなり、朋友に信ならざれば孝に非らざるなり、戰陣に勇無きは孝に非らざるなり。  
といつて、起居動作が粗暴であつたり、人から侮侮されたり、敬

務に怠漫であつたり、卑怯未練の態度があつては不孝の漢をまぬがれぬことになる。孝の偉大さの一端が明かされて居る。

佛教では一層徹底して現在ばかりでなく、過去にも廻り、將來にも及ぶ三世一貫しての孝道が力説されて居る。第一「釋迦牟尼世尊」といふ世尊の一語は、孝養第一のお方であるから世に尊い方として世尊と崇敬するのである。諸多の經文、殊に心地觀經であるとか、父母恩重經であるとか、那先經、或は法華經等々を拜すると感激の涙が自ら流れる。日蓮聖人も亦父母孝養第一の聖者であつた。齡六十に達しても猶ほ故郷を憶び、父母を追慕して毎日五十町の山道を華ら登られたのである。だから聖人の法眼から佛教や佛教を御覽になると「他の事ではない、ただ親に孝行すべきことが説かれて居るばかりである。孝養の功德が述べられて居るばかりである」と仰せられ、「父母の家を出て出家し沙門となることは、必ず父母を根本的に救済せんが爲である」と有名な開目抄に申されて居る。建治二年のお盆に延山から、鎌倉の四條氏への御書には、

何よりも日蓮が心に責き事候、父母孝養の事度々の御文候上に、今日の御文に涙更に留まらず、我父母地獄にや御坐すらんと歎かせ給ふ事の哀さよ、佛弟子の御中に目蓮尊者と申しけるは、父をば吉占師子と申し母をば青提女と申しけるが、餓鬼道に墮ちさせ給ひけるを、凡夫にて御坐しける時は知らせ給はざりければ御歎も無かりける程に、佛の御弟子と成らせ給ひて後に阿羅漢と成り、天眼を以て御覽ありければ餓鬼道におはしけり、是を御覽有つて飲食を進らせしかば、炎と

成つて彌々舌を増させ進らせ給ひしかば、急ぎ走せ還りて佛に此由を申させ給ひしぞかし。其時の御心を思ひ進らせ給へ。今貴邊は凡夫なり、肉眼なれば御覽無けれども、若しやさも有らばと歎かせ給ふ、是は孝養の一分なり。梵天、帝釋、日月、四天も定めて哀と思食さん歟。華嚴經に云く、恩を知らざる者多く横死に遭ふ等云々、觀佛相好經に云く、是れ阿鼻の因なり等云々。今既に孝養の志厚し、定めて天も納受あらん歟。

此の御文章を能く善く見解くことが大切である。私共の迷へる顛倒の眼で、地獄や餓鬼、畜生道の批判を輕辛にしないこととして、智慧を磨いて行くこと、所謂人身觀の確立が肝要である。世間には若き夫婦が、夫は妻を愛し、妻は夫をいとむのは宜いが、父母の何處にどうされてゐるかも知らず、現在父母の衣食を不足弊にし、自分達は甚澤三昧に暮して居る者も随分ある。是こそ第一の不孝者であるが、西洋化した輩は別に悪い事だとも思つてゐない。又夫婦して親に口返答をする如き重罪は、必ず因果應報で後日身に返りて感ずることもあつて始めて気が付くだらうが、それは既に後の祭りである。

親を粗末にするやうな者は、どれ程社會上に地位高からうが、手腕家といはれても、本當は三文の價值もない人非人だと言ふのが佛教である。有名な頼山陽が名聲高からんとする時、精魂を傾けて權氏のことを筆録して周國を驚歎せしめた。そこで自分も得意になつて之を本願寺の尊海師に誇示せんものと訪ねた處が、尊海は振り返りもせず「近頃不心得者があつて酒に浸りつつ忠臣

權氏のことを書いて自慢して居るさうだが、かかる不孝者に稱揚された權氏は唯かし苦々しく思はるであらう、全くお氣の毒なことである」といふ一言を聞いて、流石は山陽先生だけに、飄然として前弄を悔い其の足で郷里に向ひ、平身低頭して老いたる慈母の手をとり陳述して懇ろに仕へたといふ美談がある。

今や戦局は刻々と重大化し、一億一心最後の完勝へと拍車をかけて居る折柄、お盆も正月もあるものかとも言はれるであらう。一切を擧げて戦力増強に資すべきは今更らういふ迄もないことである。日蓮聖人の立正安國論に「夫れ國は法に依て而て昌へ、法は人に因て而て貴し。國亡び人滅せば、佛を誰か崇む可き、法を誰か信ず可き哉。先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし」とあり、又蒙古使御書には「一切の大事の中に國の亡ぶるは第一の大事に候なり、最勝玉經に云く、害の中の極めて重きは、國位を失ふに過ぎたること無し等云云」明かに國家至上の尊い御精神が窺はれる。更に「日蓮、生を此土に得たり、豈に吾國を思はざらんや、仍て立正安國論を造りて、故最明寺入道殿の御時、宿屋入道を以て見参に入れ畢んぬ」と言はれ、中興抄には「日蓮は日本國には第一の忠の者な

り、肩をならぶる人は先代にもあるべからず、後代にもあるべしとも覺えず」等勤王愛國の純情が尊君として溢れ出て居る是の聖者が、内には父母を慕はるること嬰兒のやうである。そこに前にもいふやうに、忠義といふものも、愛國といふものも、その一つだけに止まるのではない、それを通して一切の徳が光顯されて行くのである。だから此の血戰に於ても、殊勳の勇士は皆孝子であつた。この生々しい事實に鑑みても私共の兎角わがままになり易い迷ひの心を、一つ

の機會毎に感激を新にして善根を植え功徳を積むべきである。易經にも「積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり」と戒められた。人は善き種をまき、徳を重ねる其處に本當の幸福を見るのである。涅槃經に「人の命の停らざること山水にも過ぎたり、今日存すと雖も明日保ち難し」で、出づる氣は入る氣を待たない此の不淨の肉身を飾る爲にいろいろの無理をし乍ら、永久不滅の清い本心を練成もせず放任し、最後に到つて悔いても益ないことである。

茲に謹んで御寶前を莊嚴し、父母祖先乃至結縁の各尊位、並に普く大東亞戰爭陣歿政の諸尊靈に法味を供養し、其追福に擬する者である。

南無妙法蓮華經

### 團費誌料維持費及寄附金感謝入帳

(自五月二十一日至六月二十一日)

- 二圓廿錢 豐重能殿○二圓廿錢
- 越山権四郎殿○六圓六十錢 蓮成寺殿○三圓 櫻井惣右衛門殿○五圓 小山貞一殿○二圓廿錢 東峰太郎殿○五圓 渡邊雄吉殿○十圓 菅野康太郎殿○五圓 伊藤和家殿○五圓 石田勇三殿○四圓四十錢 小島政幸殿○十圓 菅井つた殿○二圓五十錢 牛田共保殿○五圓 山本金太郎殿○十圓 立正會殿○二圓七十錢 平岡越郎殿○二圓五十錢 金澤利江殿○二圓廿錢 伊藤貞一殿○二圓廿錢 平尾加代殿○五圓 御厨ミキ子殿○一百圓 難波芳松殿○八十圓 井上市造殿○二圓廿錢 佐藤大太郎殿○五圓 山下順太郎殿



本部 閣報

○愚局が苛烈になればなる程、人心は荒さむ。戦争が長期となればなる程、人々の生活は窮乏になる。そこで勤勞は倍加し、苦難は重疊するから、ややもすると神聖もいやらち鋭くなりたがる。併しこれも仕方がない、自然の成り行きだと、打捨て置いたのではどうなるかは云ふ迄もない。そこで道義心の昂揚、本心の覺醒を促がすといふことが大切となるのである。

いふ迄もなく彼等の戦争目的が國內強食巧利排他であるが、我等は道に隨つて眞に世界淨化、萬邦共榮にと進んで居る。個人の品性はそのまま國家の品性といふよりも我が最嚴なる國體の稜威が、自ら民草へ傳き力なし。今度類を法華經に奉りて其功德大な靈化を興へるのであるが、彼等は國家の成立が我國と根本的に相違して居るだけに、個人としては紳士淑女であつても、國家となれば野蠻性を發揮する其處に度し難いものがある。兎に角我等は今度愴な大戰役員滿期に付改選を行った結果、左の通り下の民草として俯仰愧ぢなき生活を營んで選定された。

(いろは順)

るるか否を靜かに御査前に反省すべきである。

勝敗の岐路は人々の道義心の興廢、信仰心の有無によつて決することを痛感して吾等は、毎週日月の二回に互つて勤加精進して居る。大切な國體會と同時に、心魂の研磨は何といつても行が加はらねば駄目である。耳や眼だけで人間は立派にならない。夫等と共に實際の修行を勵むべきである。即ち人は理智文けでは完成しない。道義と情操が大事であり、これは身に讀む時、血となり肉となり骨となるであらう。『行學』の二道を勵み候べし、——行學は信心より發るべく候』又曰く『一日進食道の身と生れて父母の孝養心に足らず、國の恩を報ずべし』今度類を法華經に奉りて其功德大な靈化を興へるのであるが、彼等は國家の成立が我國と根本的に相違して居るだけに、個人としては紳士淑女であつても、國家となれば野蠻性を發揮する其處に度し難いものがある。兎に角我等は今度愴な大戰役員滿期に付改選を行った結果、左の通り下の民草として俯仰愧ぢなき生活を營んで選定された。

統

一 昭和三十年十二月二十四日 第三編 閣報 第五百九十二號

昭和十九年六月二十七日 閣報 第五百九十二號

昭和十九年七月一日 閣報 第五百九十二號

理事	磯部滿事 池田新一 和賀義見
田中道隆 中村榮二 山田美二	
監事	小澤元重 高松正一
統一定一	一 部費金二十錢 送料二錢
	半ヶ年 金一圓二十錢
	一ヶ年 金二圓二十錢 送料共
昭和十九年六月二十七日	印刷納本
昭和十九年七月一日	發行
東京都小石川區香羽町六ノ十七	
認發編輯	磯部滿事
承發行	磯部滿事
合1 東京都四谷區內藤町一	
出1 印刷人 山田英二	
本は 東京都小石川區香羽町八ノ十一	
日標 印刷所 野島好文堂印刷所	
	東京二〇五二
東京都神田區淡路町二丁目九番地	
配給元 日本出版配給株式會社	
東京都小石川區香羽町六ノ十七	
發行所 財團 統	
法人	
電話牛込五三三六番	
振替東京九四二〇〇番	
會員 番號二二〇〇一〇〇號	